

Quatorze Juillet (7月14日)

今日(7月14日)はパリ祭の日ということで、映画『巴里祭』を上映することになりました。

この映画の原題「7月14日」を邦題「巴里祭」と命名した輸入配給元の川喜多夫妻は、「パリまつり」の感覚で有ったと述べています。もっとも、フランスでは7月14日はパリ祭ではなく、フランス革命記念日(建国記念日)と呼んでいます。

この日は、市民によってバステュー監獄が襲撃され陥落した。その後、ルイ16世と王妃マリー・アントワネットが、コンコルド広場でギロチンの露と消え、フランスが王制から共和制に変わる発端となった。その後、国民の祝日として建国記念日が制定された。映画『巴里祭』は、建国記念日の前夜のパリの下町からの物語が始まります。

この映画の製作は78年前の1933年で、サイレント(無声映画)からトーキー(有声映画)に変わって間もない時期です。当時はまだ磁気録音で無く、光学的にフィルムに記録されているため、現代の音声とは異なる巴里の下町の古さを感じると思います。 au

私の感じた「巴里祭」

この映画を鑑賞して、私なりに良かったと思う4点について書いてみました。

1. 題名が良い……原題は「7月14日」で、国民的祭日の「革命記念日」であるが、『巴里祭』という邦題を考案したのは、

本作を輸入し配給した東和商事川喜多長政社長で、試写を観て決定したそうです。

2. 情景が良い……革命記念日の祭り気分を盛り上げる提灯(ちょうちん)や万国旗に飾られた場面、にわか雨・雷雨にもかかわらず街中で踊るダンス、日本にも見られるようなパリ下町のアパート、石畳の道が遊び場の子供たちなどなど。

3. ストーリーが良い……美しい花売り娘アンナ(アナベラ)と若いタクシー運転手ジャン(ジョルジュ・リゴー)の恋を中心に、陽気な商人や気難しい金持ち老人が色を添える。そしてジャンの昔の恋人ポーラが登場し、アンナと喧嘩別れをするが最後には結ばれる。特殊な社会や特別な人の物語ではなく、ありふれた平凡な人々の普通の生活を取り上げ、我々も体験してきたような事が見事に演出された映画だ。

4. 音楽が良い……最初から最後まで画面いっぱいに流れる主題歌「巴里恋しや」のゆったりとしたワルツ調メロディーも素晴らしいが、日本語訳がすてきた。

♪「巴里の裏町 日が暮れる 夜の夢が咲く時 恋の夢が破れる 運命は一瞬にして希望を砕く なじり合い喧嘩 彼は彼女から離れていった 別の娘が腕の中 語らぬ恋の秘め事を知っていたのだろうか 巴里の裏町 日が暮れる 夜の夢が咲く時 恋の夢が破れる」 S.N

その他の関連図書

ルネ・クレール	自由を我等に	ルネ・クレール	IMAGICA TV	778.2
	そして誰もいなくなった	ルネ・クレール	モーションプロ	778.2
	沈黙は金 (IVC French)	ルネ・クレール	アイ・ヴィー・シー	778.2
	巴里祭	ルネ・クレール	IMAGICA TV	778.2
	巴里の屋根の下	ルネ・クレール	IMAGICA TV	778.2
	夜の騎士道	ルネ・クレール	IMAGICA TV	778.2
	リラの門	ルネ・クレール	IMAGICA TV	778.2
東和商事 (洋画配給会社)	川喜多 かしこ(人間の記録)	川喜多 かしこ	日本図書センター	778.0
	想い出の名画	野口 久光	文芸春秋	778.0
	ヨーロッパ名画座 野口久光グラフィック集	野口 久光	朝日ソノラマ	778.2
文芸作品「巴里祭」	岡本かの子全集 第4巻	岡本 かの子	日本図書センター	918.6
	私本歳時記(男性自身シリーズ)	山口 瞳	新潮社	913.6
	瀬戸内寂聴全集 4	瀬戸内 寂聴	新潮社	F 913.6
俳句「巴里祭」	愛の歳時記(角川mini文庫)	黛 まどか	角川書店	B 911.3
	角川俳句大歳時記 夏	角川学芸出版	角川学芸出版	911.3
	易水 能村登四郎句集	能村 登四郎	朝日新聞社	911.3
	現代秀句(日本秀句)	正木 ゆう子	春秋社	911.3
	静かな水 十七文字の宇宙に永遠が見える	正木 ゆう子	春秋社	911.3
	十七音の履歴書 俳句をめぐるヒト、コト	正木 ゆう子	春秋社	F 914.6
	12の現代俳人論 上(角川選書)	長谷川 權	角川学芸出版	911.3
	源流 古賀まり子句集	古賀 まり子	角川書店	911.3
	日本近代文学大系 56 近代俳句集	楠本憲吉	角川書店	S 918.6
	実用俳句歳時記	辻 桃子	成美堂出版	911.3
	楠本憲吉の世界(昭和俳句文学アルバム)	的野 雄	梅里書房	911.3

2011.7.14
vol.12

『巴里祭』

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

季語「巴里祭」

この作品の原題『7月14日』から受ける印象とか、直前のルネ・クレール監督の3作品にみられる、産業革命や資本主義に対する批判的な印象からすると、内容的にはパリ庶民の生活を叙情豊かに描いただけの、意外にあっさりとした作品だなーという印象でした。

多数のヨーロッパ映画名作の輸入・紹介で有名な、川喜多夫妻の苦心の作といわれる邦題『巴里祭』が、なんともびつたりのこの作品の日本公開は昭和8年。私はリアルタイム的にはこの映画を観ていないのですが、主題歌だけは中学2年生の時からよく知っていました。その頃通っていた英数塾の先生が若かりし頃、この映画の熱烈なファンで、ある時授業に蓄音器を持ち込んで、この映画の原語(フランス語)の主題歌を、英語すら習い始めたばかりの中学生相手に熱っぽく紹介してくれたのです。今にして思えば、歌詞の意味は理解できず発音も滅茶苦茶でしたが、メロディーはすぐに覚え、半世紀以上たった今でも口ずさむことが出来ます。

こんな思い出もあって、今回『巴里祭』上映の機会に、若干こだわってこの主題歌のことを調べてみました。この主題歌、昭和9年のリス・ゴーティの「A PARIS DANS CHAQUE FAUBOURG(邦題:巴里恋しや)」以来、昭和27年の淡谷のり子の「巴里祭」まで何回も作詞・編曲し直されてレコードが発売されていました。塾の先生が聴かせてくれたのは、昭和9年のリス・ゴーティのものだったようです。

今回の『『巴里祭』調べ』を通して、この映画とその主題歌が、戦前の日本の若者と文化人に、私の想像をはるかに超えた大きな影響を与えたいことを改めて知りました。収集した多くの興味深いエピソードの内、私が一番びっくりしたのは、「巴里祭」が俳句の季語に加えられているということです。季語を題名にした邦画の例はありそうですが、洋画の題名が、古くからの日本人の情緒世界の象徴の一つである歳時記で、季語としてきちんと採用されてい

たとは全くの驚きでした。

このことを教えてくれたのは「ユウジの“KINEMOUNT PICTURE”」というウェブページで、以下はその一節です。

……「巴里祭」は今では歳時記にも収められているそうです。こんな句があります。

濡れて来し少女が匂ふ巴里祭 能村登四郎

濡れて来し少女…純情可憐なアナベラの魅力。澄んだ目の美しさ、細い体、可愛い口。奇遇にも7月14日生まれの彼女は戦前フランス映画の名花で、日本では本国以上の人気があったそうです。彼女のプロマイドが一日で売り切れた、という伝説があるほど。1993年に朝日新聞が83歳の彼女の取材に成功し、パリ郊外でひっそりと犬1匹と暮らしている彼女に会えたそうです。以下は、そのときの彼女の言葉。

「最近春が来るのが待ち遠しいの。あんなに堅かったリンゴのつぼみが、奇跡のように、ふんわり花開くでしょ。ああ今年も生きていられたなあって、神様に感謝するの」、「愛した人や親しかった人はみな世を去りました。私は夏が終わってもぽつんと咲き続けている、最後の一輪のバラ。」……最後のバラ一輪は、取材の3年後の秋、86歳で散ったのでした……。

戦後も昭和30年代になると、戦前の映画を中心にした「巴里祭」の時代から、次第にシャンソンを中核にした「パリ祭」の時代へと移り変わって行きます。故石井好子さんを中心に育ってきたシャンソンの祭典「パリ祭」は、今年第49回を迎えます。(2011.7.2~3、於NHKホール) K.M.

767.8 石井好子
東京新聞出版局
『さようなら私の二十世紀』



『巴里祭』
フィルムデータ

原 題 : Quatorze Juillet
製作年 : 1933年
制作国 : フランス
上映時間: 86分、モノクロ
1933年キネマ旬報2位

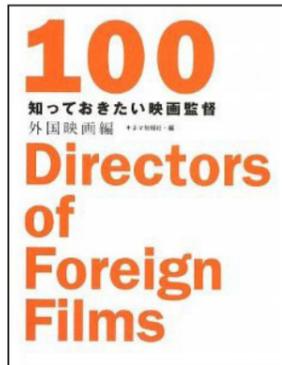
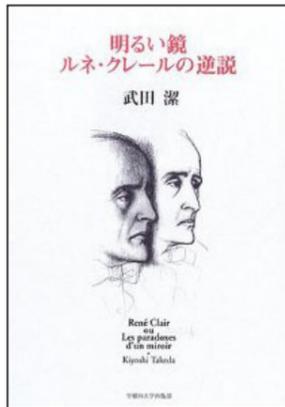
監督・脚本: ルネ・クレール
音楽: モリス・ジョベール
出演: アナベラ、ジョルジュ・リゴー、レーモン・コルディ、ポール・オリヴィエ、ポーラ・イレリ

りぶらサポータープロジェクト 「シネマ・ド・りぶら」 『巴里祭』 関連図書案内 & DVD

監督：ルネ・クレール

778. 武田 潔 早稲田大学出版部
『明るい鏡 - ルネ・クレールの逆説』

N 778.2 キネマ旬報社
『知っておきたい映画監督 外国映画編』



キャスト：アナベラ

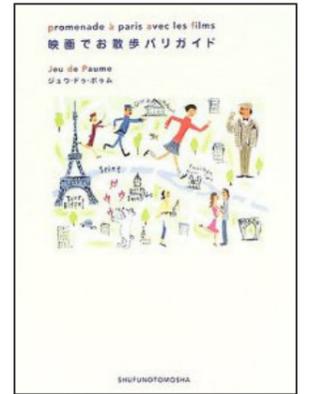
N 778.2 児玉 数夫 新書館
『懐かしの映画女優 101』



パリ

N 778.2 『映画でお散歩パリガイド』
ジュウ・ドウ・ポウム

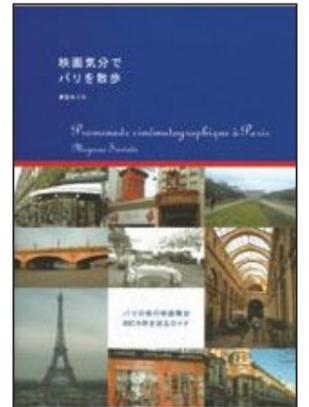
N 778.2 『映画気分でパリを散歩』
沢登 めぐみ ピエ・ブックス



その他

N 778.2 山崎 剛太郎 春秋社
『一秒四文字の決断
セリフから覗くフランス』

N 778.2 山田 宏一 新書館
『恋の映画誌』



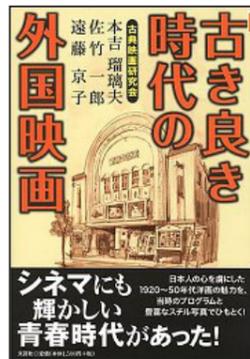
映画評

N 778.2 本吉 瑠璃夫 文芸社
『古き良き時代の外国映画』

N 778.0 淀川 長治 近代映画社
『名作はあなたを一生幸せにする』

778.0 蓮実 重彦 河出書房新社
『映画狂人シネマ事典』

N 778.0 色川 武大 キネマ旬報社
『映画放浪記 大人の映画館』



フランス映画史

I 778.2 中条 省平 集英社新書
『フランス映画史の誘惑』

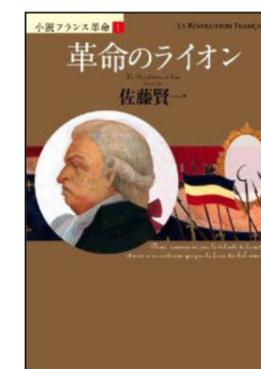
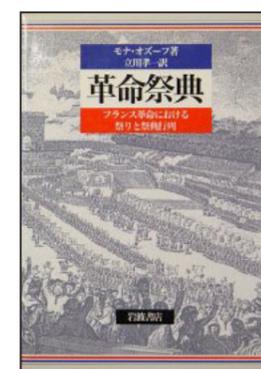
778 山田 宏一 平凡社
『わがフランス映画誌』



フランス革命

235 モナ・オズーフ 岩波書店
『革命祭典 フランス革命における祭りと祭典』

F 913.6 佐藤 賢一 集英社
『革命のライオン (小説フランス革命)』



N 778.2 近藤 道郎 展望社
『今日のシネマは? 雑学 366 日』

